

二〇二五年度

入学試験問題

国語

注意 ・指示があるまで開いてはいけません。

・答えは解答用紙に書きなさい。

・本文は、問題作成上、表記を変えたり省略したりしたところがあります。

・記号がついているものはすべて記号で書き入れなさい。

・句読点や「」などの記号も一字とします。

・試験中は横を向かないこと。早く終わっても周囲を見まわしたりしないこと。そのような場合には注意されることがあります。

・解答用紙上の消しゴムの消しカスは、しっかりとらっておきなさい。

□ 次のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) 紙をやぶる
- (2) 年賀状をスる
- (3) やけになってボウシヨクする
- (4) ルイスイして考える
- (5) 船のキテキが聞こえる

□ 次の詩を読み、あとの問いに答えなさい。

奈々子に

吉野 弘

④ 赤い林檎の頬をして
眠っている 奈々子。

お前のお母さんの頬の赤さは
そっくり
奈々子の頬にいつてしまつて
ひところのお母さんの
つややかな頬は少し青ざめた
お父さんにも ちよつと
酸っぱい思いがふえた。

唐突だが

奈々子

お父さんは、お前に
多くを期待しないだろう。

ひとが

ほかからの期待に応えようとして

どんなに

自分を駄目にしてしまうか

お父さんは はつきり

知ってしまったから。

お父さんが

お前にあげたいものは

健康と

自分を愛する心だ。

ひとが

ひとでなくなるのは

自分を愛することをやめるときだ。

自分を愛することをやめるとき

ひとは

他人を愛することをやめ

世界を見失つてしまう。

㊦ があるとき

㊣ があり

㊤ がある。

お父さんにも

お母さんにも

㊧ 酸っぱい苦労がふえた。

苦労は

今は

お前にあげられない。

お前にあげたいものは
香りのよい健康と

かちとるにむずかしい

はぐくむにむずかしい

自分を愛する心だ。

(1)

——☐Aにおいて、用いられている表現技法をすべて選びなさい。
ア 倒置法 とうちほう イ 体言止め ウ 擬人法 ぎじんほう エ 比喩 ひよ オ 対句 たいく

(2)

——☐B・☐C・☐Dに入る語の組み合わせで正しいものを選びなさい。
ア B 世界 C 他人 D 自分
イ B 他人 C 自分 D 世界
ウ B 自分 C 他人 D 世界
エ B 世界 C 自分 D 他人
オ B 他人 C 世界 D 自分
カ B 自分 C 世界 D 他人

(3)

——☐Eとありますが、このことにより、〈お母さん〉の表面上にもたらされた変化を詩中から一行で探し、はじめの四字を書きぬきなさい。

(4)

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

この詩は、父親視点で娘への愛情を語った作品である。親は子に愛情を注ぐと同時に、「かわいい子には☐Fをさせよ」ということわざがあるように、ある種の社会の厳しさを教える存在でもある。しかし、この詩では、父は娘に☐Gではなく、健康と自分自身を☐Hにする心をあげたいという深い愛情が勝っている様子が描写されている。

①

☐Fに入る語を漢字一字で答えなさい。

②

☐Gに入る語を詩中から漢字二字で書きぬきなさい。

③

☐Hに入る語を自分の言葉で漢字二字で答えなさい。

(5)

詩について適切なものを選びなさい。

ア 父から娘への愛情を表現するために、擬人法や擬態語などの多様な表現技法を用いている。
イ 娘に語りかけるような口調で表現することで、親の盲目的な愛情の危うさを描き出している。
ウ 林檎から連想される視覚・味覚・嗅覚の表現を効果的に用い、詩に一貫性を持たせている。
エ 表現を曖昧にすることで、父が自分の考えに対して自信を失っている様子が強調されている。

〔三〕 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

デパートの洋服売場を歩いていて、ふとよみがえるものがあった。

四十何年か前に、たしか七歳の幼い私は、ひとりで子供服売場を歩いた記憶がある。ひとりで、と書いたが、別に孤児ではないので、父も母もちゃんとした。デパートの別の売場で、父のラクダの下着なんか見ていたのだと思う。私は両親に連れられて夏のよそゆきを買に行ったのだが、うちの親は私を子供服売場へ連れてゆくと、

「お前の好きなのを選びなさい。ただし、今年は一枚しか買ってやらないよ。デパートに迷惑をかけるからあとになって泣いて取り替えることは出来ないのだから、よく考えて決めなさい」

すこしたったら見にくるから、と言い残して居なくなってしまったのである。

私は子供のくせに、好みにうるさいと言うのか我がままで、嫌いな色の手袋だとはめずにいて、しもやけが出来てしまう、というところがあった。洋服の形にもやかましくて、このリボンはいらないから取ってくれと、駄々をこねたことがあった。そんなところから、親にしてみれば懲らしめてやれという^①おもんばかりがあったのかも知れない。

季節は初夏であったと思う。デパートは、当時父の仕事の関係で住んでいた、宇都宮の上野という店である。

デパートの人はさぞびっくりしたろうと思う。小さい子供がひとりで、洋服売場をかけ回り、いろいろな洋服を胸にあてがっているのである。

待ちくたびた親を、待合室の長椅子で散々待たせてから、ようやく私が決めたのは黄色い服であった。黄色の絹の袖なしで、胸のところにシャーリング（縫い縮め）があり、胸から下には、クリーム色のオーガンディがふわつとかぶさっていた。胸には、黄色と黒のオーガンディでつくった造花がついていた。黒は、袖なしのところにも縁どりとしてあしらってあった。今まで一度も買ってもらったことのない綺麗な色の、フワツとした夢のような服を、子供心にいいなあと思ったのであろう。

ところが、父は私の選んだ黄色い服を見るなり、良い反応を示さず、その後わたしがこの服を着るたびに父の機嫌は悪くなった。おかげで、私は母の鏡の前に立つ自分の姿を見ると、気が滅入るようになってしまった。

ほかのにしたいと思ったが、前の年のは体に合わなくなっているし、自分で選んだのだから文句を言うな、と^②を差されているので、これで我慢するよりはかはなかった。

これを^③皮切りにして、うちの親は洋服を買うときは私に選ばせてくれるようになった。といっても一人で売場に追っ放すということはあれ以来無くて、そばについているだけなのだが。

選ぶ方の私も慎重になった。

ちよつと見にいいと思って選ぶと、あの黄色い服のように失敗をするのである。帽子にも合わなくて、損をするのは自分だということに気がついていたのであろう。

次の年の冬だったか選んだぶどう酒色のオーバーは評判がよかった。

「お前がそれを着ると、お母さん、うれしくなるわ」

と母も言ってくれた。黒いエナメル靴とも合ったし、黒いビロードの背広を着ている弟と並んで写真を撮ったら、とてもうつりがよかった。

「あのオーバーに合うと思って」

と、ビロードで出来た黒猫の子供用のハンドバッグを下さった父の友人もいた。少し地味目の品のいいものを選ぶと、自分も気分がいいし、まわりもきげんがよくて具合がいい、ということをしたとき覚えた。このぶどう酒色のオーバーは、妹二人にお下りをして、そのあと長くうちの物置きで眠ってから、戦後の衣料のない時期に、妹のハンドバッグと帽子になった。つまり二十七、八年もの間、わが家にいたことになる。

今にして思えば、これもまたひとつの教育だったと思う。

勿論、これは結果論である。大して教育もない明治生れのうちの親に、そう大

した教育理念があったとは思えないが、長い歳月を経て考えれば、⑩私はあれで、物の選び方を教わった。

⑪をもつて、ひとつを選ぶ。

選んだ以上、どんなことがあっても、取りかえを許さない。泣きごと聞かない。親も大変だったと思う。私が選んだものを、高いから嫌だとは一度も言わなかったが、保険会社の支店次長だった父がそうそう高給を取っていたとも思えないからである。何枚も買わされるよりいいと考えたのか、それとも、この方がこの子のためになると思ったのか。

はじめて黄色い服を選んで、四十年以上もたっているが、この頃になって、こ

れは、洋服だけのことでないなと気がついた。

職業も、つき合う人間も、大きく言えば、そのすべて、人生といってもいいのか、それは私で言えば、黄色い服なのであろう。一シーズンに一枚。取りかえなし。愚痴も言いわけもなし、なのである。

*オーバー コート。

*ビロード 起毛させたパイル織物で、高級品として用いられた。ベルベット。

(向田邦子『黄色い服』筑摩書房)

(1) ——— ①「おもんばかり」を説明するものとして、最も適切なものはどれですか。

ア 好き放題ふるまう娘に、うちの家計が厳しいことを示唆しようという作戦
イ 自分の勝手ばかり言う娘に対し、これを機に灸を据えてやろうという計略
ウ いつも野放図にふるまう娘への対応に、さじを投げてしまった両親の陰謀
エ 我がままな娘に対して、心を鬼にして世間の厳しさを教えようとする親心

(2) ②を含む———は、「言い逃れができないように念を押す」という意味の慣用表現です。ひらがな二字を入れて、完成させなさい。

(3) ——— ③「皮切り」の意味はどれですか。

ア 大切な約束
イ 頼みの切り札
ウ 些細なきっかけ
エ 物事のはじめ

(4) ——— ④「私はあれで、物の選び方を教わった」とありますが、それ以前の〈私〉ならどうしていたと考えられますか。本文中から八字で探し、書きぬきなさい。

- (5) 次の文章は、本文の内容をまとめたものです。あとの問いに答えなさい。ただし、㊦は本文中と一致するものが入る。

子どもの頃の自分は、㊥頑固な性格で我が物顔に振る舞っていた。しかし、私がデパートで自ら黄色い服を選んだ「Ⅰ」の経験から、両親たちの様子を考慮に入れつつ、「Ⅱ」に㊧ひとつのものを選ぶことを学んだ。その頃の両親に理念があったのか定かではないが、㊨感をもって決断することは、何事にも通ずることであろう。

- ① — ㊥「頑固な性格」と判断できる根拠を本文中から二十七字で探し、はじめと終わりの三字をそれぞれ書きぬきなさい。

- ② 「Ⅰ」・「Ⅱ」に入る適語を本文中から漢字二字でそれぞれ書きぬきなさい。

- ③ — ㊧「ひとつのもの」とは、洋服選びにおいてどのようなものですか。「Ⅰ」に続くように、本文中から二十六字で探し、はじめと終わりの三字をそれぞれ書きぬきなさい。

- ④ ㊨に入る二字の熟語を自分の言葉で考えて答えなさい。

四 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

友人関係は、究極的にはおたがいが相手を求め合うという感情に規定されている。友情に、何かの役に立ちそうだとか、仕事上のつきあいがあるからといった感情以外の要素が入ると、当該の友情はなんとなく嘘くさいものになる。【中略】個々人が相手に抱く感情が重視される人間関係とは、「相手に受け入れてもらう」ことが重視される人間関係とも言い換えられる。㉑を生きる私たちは、相手に受け入れられて「よい」友人関係を維持しなければ、つながりから放り出されてしまう可能性があるのだ。

㉒、何をやれば相手に受け入れてもらえるのか、ということはそう簡単にはわからない。だからこそ、人びとは対立を回避し、なるべく悪い感情を抱かれないように行動するのである。

情報通信端末を介したコミュニケーションは、一連の機能をつうじて、㉓相手の承認の度合いを徐々に可視化していった。【中略】

他者からのメッセージの受信量、自らが発信したメッセージに対する応答の量および速さは、それだけで、人から「受け入れられている」度合いを判断する材料になる。この承認の度合いを非常にわかりやすい形で可視化したのが、多くのSNSに実装された、人びとの投稿を評価・拡散する機能である。

Twitter、Facebook、Instagramに代表されるSNSには、いずれも、当該ソフトを介してつながっている人たちに、文字、画像、動画をつうじてメッセージを伝達する機能がある。

メッセージを受信した人は、㉔掲載されたメッセージを「よい」と思えば、ボタンを操作して、自らの気持ちを伝えることができる。俗に言う「いいね」機能である。また、メッセージをより多くの人と共有すべきと感じたならば、シェア機能をつうじてさらに拡散することもできる。

一方、メッセージを送った人は、「いいね」の数やシェアされた回数を自らのSNSのページから確認できる。この「いいね」やシェアの回数を確認することにより、私たちは自ら発信したものが、親しい人あるいは世のなかにどれくらい受け入れられているのか、容易に確認できるようになった。

情報通信ツールに実装された承認の測定機能は、私たちをSNSのページに釘付けにし、新たな行為様式を確立していった。

おたがいが受け入れ合うことで成り立つ関係性の難しさは、そもそも、自らが受け入れられているかどうか確認したいことにある。この点に加え、「受け入れられる」という行為には、もうひとつ重要な特徴がある。承認そのものに㉕に欠けることである。

かりに、現在受け入れられている人が、数日後にも受け入れられるとはかぎらない。今や「修復をする機会がなさそう」だからケンカをしないのが友人関係のあり方なのだ。だからこそ人びとは、コミュニケーションを繰り返して相互に受け入れられている感覚を更新しなければならぬ。

SNSの承認測定機能は、承認における㉖の問題を解消した。その一方で、㉗の問題は解消されないまま残っている。かりにある投稿で一万件の「いいね」を獲得したとしても、次の投稿で同じくらいの「いいね」を獲得できる保障はどこにもない。

その結果、SNSをつうじて承認を得ている人びとは、SNSへの投稿を目的として行動をおこすようになる。「いいね」の獲得を目的として、やや過剰に装飾した写真や動画をSNSに投稿する「インスタ映え」や「SNS映え」といった行為はその典型である。承認が可視化された社会を生きる私たちは、いかに多くの「いいね」がもらえるかを意識しながら、ネタ探しの行動を繰り返してゆくのである。

しかしながら、投稿用のネタがそう長く続くわけではない。また、次の投稿は受け入れられないかもしれないという心理的緊張は、それだけでストレスになる。結果として一部の人はネタ探しに対する疲労をうったえるようになる。

その一方、ネタの継続を志向して過剰な表現に走る人も出てくる。さらに、相手の投稿に「いいね」を押すために定期的にSNSソフトを開く人も現れる。友だちが送った投稿に承認のメッセージ、すなわち、「いいね」を送ることこそが友情の証だからである。

SNSにより可視化された承認は、不安定な関係におびえる人びとをSNSに引きつけてゆく。「常時接続」の時代の、目の前にいない人による拘束は、常時接続前の時代から考えられないくらいに強まっている。

しかも、そこで交わされるコミュニケーションからは、対面の会話で見られる

何気ない要素は削減され、メッセージ性の強いものが中心を占めるようになる。
⑨、「ふつう」の自己よりも「ちょっと盛った」自己が提示されるのである。

常時接続をしながら、「明るい自己」を見せることで成り立つ友人関係。そのようなつながりに相談する人が減ってしまうのも、たしかに納得がいく。【中略】人と人を強制的に結びつける社会の拘束力が弱まり、つながりに感情の入る余地が増えてゆく。このような状況は、人びとのつながり方を変えると同時に、友人への注目を高めていった。

しかしながら、友人の概念じたいは定義がたく、曖昧である。また、友人関係を構成するどちらかが、相手を「友だちでない」と感じた瞬間から、つながりは存続の危機にさらされる。

このような危機感を埋めてくれたのが、目の前にいない人をつなぎ止める役割を果たす情報通信ツールであった。

情報通信ツールを使うようになったことで、曖昧であった交遊の記録が残され、私たちの人間関係にわかりやすい境界線が引かれるようになった。私たちは、情報通信ツールの残す「コミュニケーションの記録」を参照しつつ、友人とそうでない人の境界線を意識して行動するようになったのである。

友人の境界線の内側に入るために肌身離さず情報通信端末をもち、端末の確認

を怠らないようにする。常時接続の環境は、目の前にいない人との交流に、私たちが絶えずしほりつけているのである。

その一方で、私たちが目の前にいない人と日常的に交流するようになってから、それほどの時間が経過したわけではない。電気の効能を見出し、電話がお茶の間に入るようになったのは、ほんの五〇年前のことである。

電話の普及により、目の前にいない人との交流に慣れた人びとは、ケータイ、スマホをこれまでにない速さで受け入れていった。人との接触を「不要不急」と見なしたコロナ禍が、それに①をかけ、目の前にいない人との交流は、対面の交流と同じくらいの重みをもつようになった。

しかしながら、私たちの身体のさまざまな機能、文化・社会のさまざまなシステムは、おおよそ対面での交流をもとに築かれてきた。重要なのは、ケータイ、スマホの急速すぎる普及によって、その影響力の検証がロクになされないまま、つながりのあり方が変えられてしまったことだ。技術の進歩も重要だが、①技術がもたらす帰結の検証も、それと同じくらい重要である。この点については、私たちの心に留め置くべきだろう。

(石田光規『友だち』から自由になる』光文社新書)

(1) ①に入る語を答えなさい。

- ア こちらからはたらきかけなければ置き去りにされてしまうような社会
イ 相手が自分を受け入れてくれなくても自然とつながってしまう社会
ウ 目の前にいない人とも強制的にむすびつきができてしまうような社会
エ 交遊関係が広がって感情以外の要素で友情を定義づけてしまう社会

(2) ②・③に入る接続詞を答えなさい。

- ア つまり イ 例えば ウ あるいは エ しかし オ さらに

(3) ④「相手からの承認の度合い」とありますが、これを具体的に説明している部分を本文中から二十九字で探し、はじめの五字を書きぬきなさい。

(4) ——— ①「掲載されたメッセージを「よい」と思えば、ボタンを操作して、自らの気持ちを伝えること」は本文中で何であると書かれていますか。四字で書きぬきなさい。

(5)

⑤	・	⑥
---	---	---

に共通して入る語を答えなさい。

ア 人間性 イ 必然性 ウ 持続性 エ 客観性

(6)

⑦

に入る言葉を本文中から一語で答えなさい。

(7)

⑧

を含む——は、「物事の進行を一段とはかどらせる」という意味の慣用表現です。ひらがな四字を入れて、完成させなさい。

(8) ——— ①「技術がもたらす帰結の検証も、それと同じくらい重要である」とありますが、筆者はなぜそのように考えるのですか。

ア 現代人は、メッセージ性を高めるために虚勢を張り非対面で自己表現する人が増えており、対面交流よりも重視されている風潮を筆者は心配しているから。
イ 常時接続される以前は、社会的拘束力がなく、人々の心は自由だったが、現在は多くがSNSに縛られており、承認のためにどんどん過激化しているから。
ウ 曖昧であった交遊の履歴がすべて目に見える形で残されることで、心を拘束された人々は安心するが、友人の境界線を引くことが善とは言いきれないから。
エ いつ離れるかもわからない友人関係における不安を埋めたのは、情報通信端末であることは否定できないが、それによるさまざまな功罪もあるはずだから。

(9) 本文の内容に合っているものを答えなさい。

ア 友人とは常時つながっていられる人であるという定義が明確にあるので、情報通信端末を手放せない時代になってしまっている。
イ 現代社会に普及したSNSは友人関係を承認欲求で結ぶものであり、一刻も早くSNSを排除すべきであると警鐘を鳴らしている。
ウ 友人とつながるためにはありのままの自分を見せる必要があるのですが、自己の在り方を模索する情報通信ツールの使い方もある。
エ 友人関係とはお互いを求め合うという感情から成り立っているので、他の要素を入れると一気に信ぴょう性の低いものとなる。

〔五〕 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

「やや」（あたし）は、小学校のときに親友「一香」と真善美道場の古友先生から剣道^{けんどう}を習っていたが、途中から一香が比木剣道塾^{しきけんどうじゅく}に移ったことや、剣道の強い帝督中学校に進学したことを納得^{なつとく}できずにいる。その後、地元の公立中学校で土井先生や仲間の理衣・なつ・姫奈らとともに剣道部を立ち上げて、帝督中学校に勝つことを目標にして取り組んでいた。そのような中、家の経済的な事情で剣道の道具である胴^{どう}と垂れが手に入らず困っていたなつが、練習場の前に胴と垂れをつけて現れ、部員一同が驚いた。

「なつ、それどうしたの!？」

「……くれたの。一香が」

なつは気まずそうに、あたしの顔色をうかがってくる。

「アイツが？」

あたしは反射的に顔をしかめた。なんでアイツが。気もちがぐちゃぐちゃで、なにも言えない。

「ややたちが、お古の防具がないか、いろいろ近所の人にきいてまわってくれたでしょ。それが、一香の耳にも入ったみたい。一香、帝督に入るときに、学校指定の防具に買いかえなきゃいけなくて、前に使っていたのが余ってたんだって」

④その話をきいて、あたしはきゅつとくちびるを結んだ。

一香のなんて使わないで。

……と言いたいけれど、助かった。正直、助かった。

だって、これでまたなつと剣道ができる。防具がなければ、なつは試合にも出られないところだったのだ。

でも、素直^{すなお}に感謝できない。

一香のことはやっぱりにくい。むかつくし、腹が立つし、きらい。

あたしは、自分の気もちがよくわからなくて、ただなつの話をきいていた。

「これね、一香のお父さんが買ってくれたものなんだって」

なつが、大事そうに赤い色があざやかな胴をなでる。

一香のお父さんは、昨年の秋に亡くなった。そのお父さんが買ってくれたものだということは、大切な形見じゃないか。

「一香のお父さん、剣道をすごく応援^{おうげん}していたよね」

たしかに、一香のお父さんは大会があると必ず応援に来ていた。朝の走りこみにつきあっているのを見たこともある。胴打ちがうまくできないとなやんでいた一香のために、段ボールを重ねた自作の胴を自分の腹にまきつけて、自ら胴打ちの相手をしていた。

「一香に、真善美をやめて比木剣道塾に移るようにすすめたのは、お父さんだったらしいよ」

おどろいた。それは初めてきく話だ。どうしてだろう。

「もっと強くなりたい」という、一香の願いを、一香のお父さんはかなえてあげようとしたのかな。

試合では勝ったり負けたりしていたから、真善美道場で剣道を続けるよりも、常勝している、はなやかで強いイメージのある比木剣道塾のほうがよいと思ったんだろう。悪気はなかったんだ。一香のためだった。

だとしたら、一香は、それを受け入れるしかなかっただろうな。

もし、自分だったら――。

もし、あたしが一香の立場だったら――。

一香と同じことをしてたかもしれない。

「実はさ」と、理衣も切りだした。

「一香のお父さん、病気で余命宣告されていたの。だからね、一香、お父さんのために優勝するって、約束していたらしいの」

そうすればお父さんに、元気をあげられると思ったのだろう。一香は、お父さんの期待に応えようと必死だったのだ。

一香が比木に移った理由。そして、勝ちにこだわる理由。

それはお父さんとの約束だったんだ……。

⑤頭をガツンとなぐられたような気がした。

あたしは、なにも知らなかった。いや、目をむけようとしてなかった。

一香の立場や気もちなんて全部無視して、勝手に怒^{おこ}ってた。自分が裏切られて

傷ついたからって、一香に当たってたんだ。

でも、一香はなにも言わずに、全部自分が悪いと引き受けて、あたしにのしられても怒りもしなかった。

あたしは、なんて子どもだったのだろう。一香のお父さんが亡くなったことは知っていたのに。そのあとに古友先生まで亡くなって、一香が、どんなに悲しかったことか。苦しかったことか……。そんな一香を、どうしてあたしはつき放してしまったのだろう。

胸が、いたい。あたしは一香が帝督で剣道をしていたときの顔を思い出していた。

◎一香は、ひとりで剣道をやっている。

少なくとも仲間と楽しそうに話しているところを見たことがない。みんな、必死だからだ。

自分が怒られないように、勝つために、必死なんだ。そんなの、楽しいはずがない。

一香には、どうしても勝つための剣道が必要だった。だから比木に移った。

そして一香は、小学生最後の大会で見事に優勝を果たした。お父さんとの約束を守った。

だからもう十分だろう。そろそろ、自由になったって、いいはずだ。

「大丈夫？」

めずらしく無言になっているあたしに、姫奈が声をかける。

「①一香は、なつに自分の想いをたくしたんだよ」

みんなが、あたしの言葉に ② を丸くした。

一香と決別して以来、あたしの口から「一香」の名が出ることはなかったからだろう。

だけど、久しぶりによんだ気はしなかった。だって、いつも一香のことを考えていた。いくら腹が立って、きらいになろうとしても、一香のことをわすれられなかった。

一香に、正しい剣道で勝てることを示したい。

一香のためにも。

あたしは、本当は、一香にもどってきてほしいのかもしれない。

あたしは、本当は、前みたいに一香と剣道がしたいのかもしれない。

「帝督に勝とう、みんなで」

仲間とともに、剣道を楽しみたい。

それができない一香は、なつにその想いをたくしたにちがいないんだ。

「そうだね」

理衣がうなずいた。

「勝たなきゃね」

みんなも力強くうなずいた。みんなの想いは、同じだ。

そこへ、仕事でおくれていた土井がやって来た。

「なんだ、まだ準備してなかったのか。ほら、始めるぞ」

「はい！」

五人の気合いの入った声がそろって、土井は面食らっていた。

「ずいぶんやる気だな」

「あたりまえです。あたしたち、絶対優勝しなくちゃいけないんで」

「その意気だ」

土井は決して ③ でわらわなかった。

「おまえたちは、優勝するぞ」

土井はそう、本気で信じている。そして、あたしも、みんなも。そのはずだったのに――。

真善美道場が火災に遭い、全焼してしまう事件が起きた。以前亡くなった古友先生や仲間との思い出のつまった場所であった真善美道場を失い、剣道の大会を前にふさぎ込んで部屋に引きこもってしまったややのもとに、一香がやってくる。

「悲しいね」

うん、悲しいよ。

「くやしいね」

うん、くやしくてたまらないよ。

「やや」

ん？

「なにもかも失っちゃったって思ってる？」
思ってるよ。

古友先生も、道場も。

「でも、ややはなにも失ってないんだよ」

なに言ってるの。なんにもなくなっちゃったじゃん。

「だって、生きてるでしょ。剣道できる健康な身体がある」

あたしは、いつのまにか扉^{とびら}を背にしてすわっていた。

なぜだろう。扉一枚へだてたむこうで、一香も同じようにしてすわっている気がした。

一香と、こうして話せるのが、うれしい自分がいる。

「^㉔それに、仲間もいる。みんなが書いたややへのメッセージ、ちゃんと見て」

あたしは、積み重ねた一番上にあるファイルを手にとって、便せんのひとつを広げた。【中略】

「ややは、なにも失ってないよ」

みんなからのメッセージには、必ず、『待ってるからね。早くもどってこい』と書かれていた。

身体の内側から、なにかがふつふつとこみあげてくる。それがツンと身にしみて、涙^{なみだ}があふれてくる。

みんなに、会いたくなってきた。

「きいてほしいの、やや」

一香は、ふうとひとつ大きく息をはいた。

「前にも言ったけど、わたし、今、剣道が楽しくないんだ」

一香のその言葉に、ドキリとした。

「勝たなければ意味がないと思ってやってきたのに、今は勝ってもうれしくない。負けたらくやしいうより、むなしくなるの。だから、ややたちが楽しそうに剣道しているの見て、すごく、うらやましくなっちゃった。練習試合で、なんでわたしだけこっち側にいるんだろうって。ややたちの、反対側にいるんだろうって。でも、もうもどれないのもわかってる。わたしは、ややたちを裏切った。だから、今の剣道をつらぬくしかない」

「そうやって、一香は、自分をごまかしてきたんだ」

気づけば、言葉を返していた。

あたしは、一香があたしたちを裏切ったことに怒っていた。最初はそうだった。でも、帝督にいる一香を見ていて、もっと別の理由があるんだと気づいた。

「あたしは、自分にうそをついて、剣道を楽しんでいない一香に腹が立っていた」
勝たなければ意味がない。

それは、お父さんのためにこそ意味があった。けど、もういいんだよ。一香は、ほんとうは初めから楽しく剣道をしたかったんだよね。

「勝つために卑怯^{ひきょう}なことをするのは、自分のことがきらいになっていく。周りをけおとして、ポジションを勝ち取るのだって、苦しい。一香、そうなんですよ？」

言葉は返ってこない。代わりに、嗚咽^{おえう}する声がきこえてきた。それが、答えだ。

「もうそろそろ、剣道をまたいっしょに楽しもうよ」

きっと全部、お父さん、わかってくれるよ。

「^㉕一香、はないちもんめしよう」

剣道は、正しくなくちゃいけない。

でも正しすぎて、なんだろう。あたしはずっと、形だけのことだと思っていた。でも、ちがった。

それは、心の正しさでもあるんだ。

ごまかしなく、正々堂々とやるからこそ、意味がある。自分の弱さを見つけて、成長できる。でも、それはかんたんなことじゃなかった。

自分にむきあうって、しんどい。つらい現実や、いやなことからは、目をそらしたくなる。

だからこそ、ひとりではなくチームワークが必要なんだ。

ようやく、わかった。

たがいの弱さを見とめあえる仲間がいるからこそ、強くなれる。自分の弱いところをたくせる仲間がいるから、安心して戦える。

みんなのおかげで、あたしもまた力がわいてきた。

一香には今、そういう仲間がない。

いや、いる。あたしたちが、一香の仲間だ。

(1) — ④「その話をきいて、あたしはきゅっとくちびるを結んだ」とありますが、それはなぜですか。

ア 一香の余計なおせっかいだと批判したかったが、なつが自分に同調してくれなさそうで心もなかったから。

イ 一香のおかげでなつと剣道ができるようになって嬉しい反面、何もできなかった自分をふがいなく思ったから。

ウ 一香の思いやりを賞賛しなかったが、一香との関係を周りに知られていてその気持ちを隠すしかなかったから。

エ 一香に対して腹を立てている中で、彼女がわざと余裕を見せたように感じ、言葉では言い表せなかったから。

(2) — ⑤「頭をガツンとなぐられたような気がした」とありますが、「あたし」のどのような心情が読み取れますか。

ア 一香がお父さんとの約束を守れずに悩んでいることに気がつかなかった後悔。

イ 一香が本当は自分たちを裏切るつもりはなかったことへの驚きと安心感。

ウ 一香の苦しみを理解せず、自分の傷つきばかりにとらわれていたことへの自責の念。

(3) — ⑥「一香は、ひとりで剣道をやっている」とありますが、どのような剣道をやっていますか。空らんに入る言葉を本文中から書きぬきなさい。

①(七文字)

でも、勝たなければ

②(五文字)

と、勝ちに

③(四文字)

剣道。

(4) — ⑦「一香は、なつに自分の想いをたくしたんだよ」とありますが、「自分の想い」とはどのような想いですか。「く」という想い。」に続く形で本文中から十
五字で探し、はじめの五字を書きぬきなさい。

④

・

⑤ ⑥ は身体に関係する言葉が入ります。漢字で答えなさい。

(6) — ⑧「それに、仲間もいる」とありますが、どのような仲間ですか。本文中から十五字で二つ探し、それぞれはじめの四字を書きぬきなさい。

(7) 本文の内容に合っているものを答えなさい。

ア 帝督で剣道をする一香は自分が怒られないようにすることに必死で、ややはそんな一香をあなどっていた。

イ 卑怯な剣道で勝ち続ける一香を見て、ややは自分たちにくそをついて剣道が続けていることに腹が立った。

ウ ふさぎ込んでいたややは、仲間からの手紙を見て、健康で剣道ができることが一番であることに気づいた。

エ 一香が本心を隠して剣道が続けることに苦しんでいる気持ち、ややは仲間として受け止めようとした。

(8) — ⑨「一香、はないちもんめしよう」の「はないちもんめ」とは、本来子どもの遊びの一つで、本文中では比喩表現で用いられています。では、この発言は、
「やや」が「一香」に対して、これから何をして、どうなることを提案した言葉ですか。具体的な内容を自分の言葉で三十字以上三十五字以内でまとめなさい。